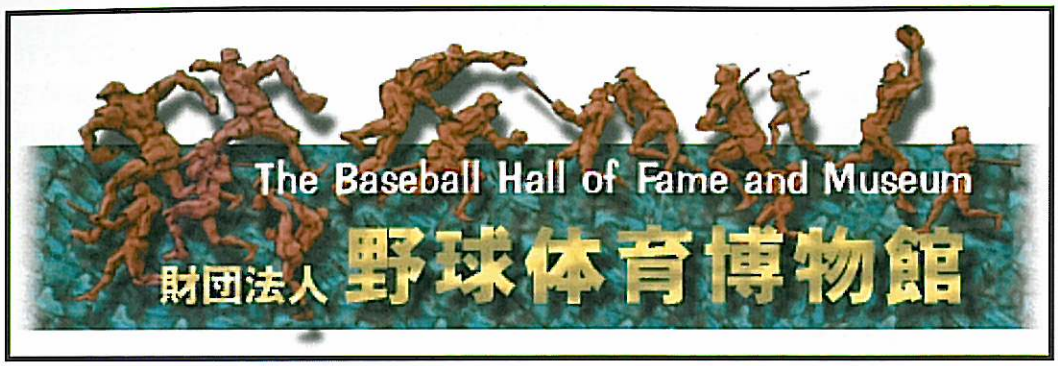
平成13年3月13日第三種郵便物許可　2009年1月25日発行　年4回（1、4、7、10月の25日発行）
Newsletter

THE BASEBALL MUSEUM SINCE 1959
Vol.18 / No.4



平成21年「野球殿堂入り」記者発表

事務局長　佐藤　宏

1月13日㈫午後3時より野球体育博物館殿堂ホールにおいて平成21年の「野球殿堂入り」記者発表が行われました。今回は競技者表彰部門で若松 勉さん、故・青田 昇さん、特別表彰部門で故・大社 義規さん、故・君島一郎さんの計4名が殿堂入りされました。加藤 良三理事長の挨拶につづいて、豊蔵、小池両常務理事から通知書が授与されました。最初に登壇した若松さんは、「殿堂入りのお知らせをいただいて以来、ずーっと頭のなかが真っ白な状態が続いている。振り返れば、ここまで小さな体でよく頑張ってこれたと思う。今の自分があるのはバッティングだけではなく人生の師でもある中西 太さんのおかげです。」これに応えるかたちで登壇されたゲストスピーカーの中西 太さんは、北海道のノンプロ（当時の電電北海道）に小柄だがすばらしいセンスの持ち主がいると聞き、自らスカウト活動に赴いた。一方、プロ入りにあまり乗り気ではなかった若松さんは、中西さんに会ってしまうとヤクルトへの入団を断れないと考え、当分の間奥さんの実家に身を潜めていた。そうとは知らない中西さんは若松さんのアパートを訪ねるが、郵便受けに溜まった新聞の山を見て愕然とする。結局、若松さんに会うことは出来ず、父君に「俺に任せろ。東京で待っている」という伝言を残し、北海道をあとにした。といったお話をまるで昨日のことのように生き生きとしかもユーモアたっぷりにしていただきました。

また、青田 昇さんのゲストスピーカーとして登場された杉下 茂さんは、青田さんは大変な強肩で軍事教練の手榴弾投擲訓練では84mを記録し誰も敵わなかったことや、杉下さんのフォークボールが打てないとみるや「無駄な抵抗はしない」ということで投球と同時に背中を向けてしまう茶目っ気なところ、さらに第一次長嶋内閣で巨人軍のヘッドコーチを勤めた時の伊東キャンプでの凄まじい練習などを紹介してくださいました。

その後、殿堂入りの方々の写真撮影を行い、多数の報道陣のご出席により熱気あふれる雰囲気のなか、記者発表は無事終了しました。

後列左から　小池 唯夫常務理事、加藤 良三理事長、豊蔵 一常務理事
前列左から　竹内 宣之氏、大社 啓二氏、青田 満子氏、若松 勉氏

後列左から　大村 文夫氏、上田 利治氏、杉下 茂氏、中西 太氏
前列左から　竹内 宣之氏、大社 啓二氏、青田 満子氏、若松 勉氏

競技者表彰委員会

第49回の競技者表彰委員会は、プレーヤー部門から元ヤクルト監督の若松 勉氏（61）、同エキスパート部門からは元大洋監督の故・青田 昇氏を選出した。

若松氏は「聞いたときは頭が真っ白になった」といって喜びを表した。公称168センチの身長は、正確には166センチだった。小さな打者が、永久にたたえられる大きな栄誉をつかんだ。北海高から電電北海道（現NTT北海道）を経て、71年のドラフト３位でヤクルト入り。２年目にして首位打者を獲得、78年には初の日本一に貢献してMVPも獲得した。歴代日本人１位となる通算打率３割１分９厘が光る。

そんな「小さな大打者」も、望んだプロの世界ではなかった。自信がなかった。入団前に結婚もしていた。夫人には「３年間だけ辛抱してくれって言ったよ。ダメだったら戻って焼き鳥店でもやるつもりだった」と当時を振り返った。プロ入りを決意したのは今も恩師と慕う中西 太氏（当時のヘッド兼打撃コーチ、99年殿堂入り）の「体が小さくても下半身を鍛えれば野球はできる」という言葉だった。

若松 勉（わかまつ つとむ）氏　プロフィール

1947年４月17日生　北海道出身
1971年～1989年　ヤクルト
現役引退後はヤクルトのコーチ、監督を歴任。
実働　19年
2062試合　6808打数　2173安打
884打点　220本塁打　打率.319

北海道・留萌出身で中学まで競技スキー部にも籍を置いた。その強靱（きょうじん）な下半身を、さらに中西コーチのもと鍛え上げた。入団当初は足の皮をむきながら、それでも畳の上でスイングを繰り返した。今のヤクルト青木にも引き継がれる「足の裏で地面をつかむ」感覚の下半身を土台に、通算2173安打を生み出した。北海道出身者初の殿堂入り。表彰式は７月24日、札幌ドームの球宴第１戦。若松氏には故郷に錦を飾る舞台となる。

青田氏は昨年新設されたエキスパート部門からの選出だった。巨人の主軸を担い、首位打者１度、本塁打王５度、打点王２度獲得。そのプレーぶりから「じゃじゃ馬」と呼ばれた。若手育成にも定評があり、阪神と阪急ではコーチとしてリーグ優勝を導いている。記者会見に出席した満子夫人は「青田が健在なときに自身の手で受け取って欲しかった」といって目をうるませた。

青田 昇（あおた のぼる）氏　プロフィール

1924年11月22日生　兵庫県出身
1942年から巨人、阪急、大洋などで活躍。引退後もコーチ、監督として若手育成に努めた。
1997年11月４日　逝去

実績からすれば、遅すぎた殿堂入りといえるかもしれない。79年秋に巨人のヘッドコーチに就任しながら、暴力団にかかわったとする週刊誌報道があり、翌年開幕前にユニホームを脱いだ。その影響もあったろう。現役時代を知る杉下 茂氏（85年殿堂入り）は、長嶋巨人の伊東キャンプについて語り「発案したのは青田さん。あれで（巨人は）見違えるようなチームになった。選手への情熱がすごかった」とたたえた。また青田氏が手りゅう弾投げの日本最高記録を保持していた話も披露した。97年に72歳で死去。満子夫人によると今、17人の孫のうち３人が少年野球でプレーしているという。あの「じゃじゃ馬青田」そっくりのすごい選手が近い将来、出現するかもしれない。

プレーヤー部門は、野球の取材に関して15年以上の経験を持つ委員（316名）が、７名連記で投票した。当選必要数は228票。若松氏は288票を集めて殿堂入りを決めた。エキスパート部門は、競技者表彰の幹事と殿堂入り競技者（46名）が３名連記で投票、青田氏が当選必要数の27を上回る31票を集めて、同部門からは初の殿堂入りとなった。

（競技者表彰委員会代表幹事　米谷　輝昭）

特別表彰委員会

１月９日、東京ドームホテルにおいて、特別表彰委員会が開催されました。委員14名全員出席のもと、活発かつ真摯な論議が交わされた後、投票が行われ、大社 義規氏、君島 一郎氏の野球殿堂入りが決定しました。

前年までの候補者から殿堂入りを果たされた嶋 清一氏を除き、新たに大本 修氏を加えた10名の候補者について、委員それぞれの立場から様々なご意見がでました。

投票結果は

大社 義規氏	12票
君島 一郎氏	11票
古田 昌幸氏	７票
長船 麒郎氏	６票
大本　修氏	４票

で、殿堂入りに必要な票数、投票総数14票の４分の３以上である、11票に達した大社、君島両氏の殿堂入りが決定しました。

大社氏は昭和48年（1973）、人気が低迷していた日拓ホームフライヤーズを買収して野球界に参入。野球を愛し、球界で一番球場に足を運ぶ名物オーナーとして知られ、昭和56年（1981）には念願のリーグ優勝を果たしました。また、チームの北海道移転にも影響力を発揮したといわれています。

大社（おおこそ） 義規（よしのり） 氏　プロフィール

1915年２月１日生　香川県出身
1942年　徳島市で徳島食肉加工場を創設
1963年　鳥清ハムと合併し、日本ハムと商号を変更
1973年～2002年
日本ハム初代オーナー
2005年４月27日　逝去

１月13日に行われた記者発表の席で、ゲストスピーカーとして登壇された上田 利治氏（03年殿堂入り）は、大社氏が大変な負けず嫌いで、リーグ優勝を他の誰よりも喜んでいたことや、当時の落合選手獲得の裏話などを話してくださいました。

君島氏は明治20年（1887）生まれ、栃木県出身。日本銀行勤務を経て昭和15年（1940）朝鮮銀行副総裁に就任。戦後、公職からは遠ざけられますが、野球の研究に打ち込まれ、昭和47年（1972）に上梓した「日本野球創世記」（ベースボール・マガジン社刊）は野球研究者のバイブルともいわれています。

君島（きみじま） 一郎（いちろう） 氏　プロフィール

1887年４月16日生　栃木県出身
第一高等学校在学中は野球部で活躍。
明治時代の野球草創期の故事解明に取り組み、20年の歳月を掛けて資料を収集した。その資料を基に「ベースボールの渡来は明治５年、発祥の地は現学士会館敷地」という見解を明らかにした。
1975年４月25日　逝去

また、第一高等学校野球部OB会会長の大村 文夫氏は、君島 一郎氏の功績について、ベースボールが日本に渡来したのは明治５年、これが発祥の地というべき場所は現学士会館敷地と特定したことを指摘され、殿堂入りを喜んでいました。

（事務局長　佐藤　宏）

コラム／博覧・博楽 (29)

野球体育博物館図書室にて

牧 啓夫（野球体育博物館維持会員）

私にとって、野球体育博物館の思い出は、展示物の思い出は少なく、ほとんど図書室の思い出です。

私が野球体育博物館を最初に訪れたのは、まだ後楽園球場があった30年ほど前でした。目的は作成をしつつあった野球ゲームの為の記録の調査でした。

当時の野球体育博物館は、今のように球場と一体になっておらず、独立した建物でした。時代が時代ですからしかたないとはいえ、蔵書の目録もすべて手作業で整理されていて、コピー機もないという状態で、記録を調べてても筆記で書き写さなければならず、おせじにも調べやすいとは言えなかったですね。

しばらくは野球ゲームと記録調べ、で楽しませてもらいました。

その後、大阪に本社がある会社に転職したこともあって、しばらく野球ゲームとも野球記録とも離れていました。ある時、元の野球ゲーム仲間から私の野球ゲームを販売したいとの連絡がありました。彼は東京在住で出版する翔企画も東京の会社ですから、大阪に住んでいた私との作業は難しかったですね。それも彼の行動力のおかげで1992年に「オールスターベースボール」という名前で出版されました。

その作業の途中で、おおげさに言えば、人生を変える出会いをさせてもらいました。「野球の神様」宇佐美 徹也さんとの出会いです。当時の宇佐美さんはプロ野球機構のBISデータ本部長をされており、BISデータ本部自体も野球体育博物館の中にありました。記録本で宇佐美さんの名前は知っていましたが、実際に会えたのは感動モノでしたね。

その後、帰京するたびに宇佐美さんを訪ねていました。大阪から東京に戻ってきて野球体育博物館を訪れる機会も増えました。宇佐美さんとは随分いろいろな話をさせてもらいました。いわゆる「飛ぶボール」の話や新しい評価基準の話（今で言うとセイバーメトリクスに近い話ですね）投手起用の話も多かったです。

私はどっちかというと偏屈な性格なもんで、随分宇佐美さんのことを批判もさせてもらいましたが、寛大に接してもらいました。宇佐美さんも偏屈な方ですが（失礼！）筋がとおった批判には耳を傾ける度量もお持ちです。

いまでも忘れないのは、私が「宇佐美さんの仕事は素晴らしいが、後進の指導をもっとやってください」と批判がましい事を言った時、宇佐美さんは直接答えず、「挑戦してくる人がいないんだよね。誰かが挑戦してくれれば負けない自信はある」と言われました。

随分経ってから、ある先輩に話したところ、「宇佐美さんは、いま指導しているんだよと言いたかったのではないか」と言われ汗顔の至りでした。

その頃から記録を調べていくと、前の野球ゲームへの不満がたまってきました。そこで、改良にとりかかりました。現在も「インパクトベースボール」の名前で自費出版し、改良もすすめています。

その後、野球体育博物館の図書室の縁で、野球文化學會やアメリカ野球学会に入会することもでき、いろいろな出会いもありました。これからも、ちょくちょく出かけますので、これをお読みの方とも野球談義ができたらいいですね。

殿堂入りの人々を語る (22)

祖父の思い出

岡　　百子（有馬 頼寧氏 孫）

1969年野球殿堂入り
有馬 頼寧氏レリーフ

祖父に連れられて、初めて後楽園に行ったのは多分昭和13年（1938）、私が小学校５年の頃で、多忙な父親の代わりに一人っ子の私を、自分が連れて歩こうとしたのだと思います。祖父にとって荻窪の自分の家を朝出てしまうと、四谷の娘夫婦の家は良い足場になっていて、たびたび来ては時間をつぶしておりました。ですから後楽園へ行く途中で私をひろって連れて行くのに、いたって都合がよかったのだろうと思います。

祖父祖母の結婚は大変早く（明治時代のことで）19歳と17歳（満年齢でなく）でございました。17、８歳の母と手をつないで銀座を歩いていたところ、後ろを歩いていた祖母が「手を離してお歩きなさいな。今すれ違った人たちが“この頃はああいうのが（若い女を連れて歩くのが）はやるんだよ”と言っていましたよ。」と笑ったそうで、祖父は自分がハンサムに見えたのが嬉しかったか、または綺麗な娘を自慢に思ったか－おそらく前者だったと思います－。従って42、３歳の時に私が生まれたので「おじいちゃま」と呼ばれるのには「まいった」と言っておりました。

祖父は学生時代ボートの選手でしたが、母達６人きょうだいは動物園から始まって、ボート、野球、テニス等々を見に連れて行ってもらったそうでございます。私の場合、小学生の女の子にいろいろ説明してくれそうに思いますが、あまりそんなことも無く、一緒に楽しんで笑ったり残念がったりしながらネット裏に座って見ているうちに、試合もプレーも面白くなってきたということです。はじめから説明などはせず、本人次第というのが孫に対する態度でございました。私は洲崎（満潮になると外野に海水が満ちてきた）や上井草では公式戦を見ておりませんが、その頃から上井草を本拠地としてのセネタースのオーナーだったと聞いております。たいした娯楽も無かった当時、私の学生時代は、日曜日の午後は後楽園ということになりました。比較的、厳格に育てられていた私にとって祖父とは自由でのびのびした関係で、勿論両親とは相談してのことだったと思いますが、旅行にも連れて行ってもらいましたし、誘われると喜んでついて歩きました。祖父自身、子供の頃はずいぶん自由に育てられていて使用人達の子供と散々悪いいたずらをしていたそうです。その頃は、自分の日常生活もその人達の生活も、別に変ったところがあるとも思わずに成長していったそうで、大人になってから役立つ良い経験をした、とよく話しておりました。ですから差支えがないと思う所へはどこへでも連れて行って、子供自身に自由に見たり聞いたりさせていたのだと思います。

思い出して面白かったのは、ゲームが終わってから選手更衣室（多分女人禁制だった）へ私を連れたまま行って、私は初めて男性の裸を見ました。男の兄弟がいれば何でも無いことだったのですが、一人っ子にとっては大変珍しいことでした。

祖父のおかげで戦前の名のある選手のプレーは殆ど見ましたし、沢村投手が最初の徴兵から帰ってマウンドに立った時、又再び召集された時、ファンに対する挨拶など貴重な場面にも居合わせました。当時の審判、監督、各チームの主要メンバーの名前は今でも覚えておりますが、若い方の多くが再び球場に帰って来られなかったことは、本当に悲しいことでございます。

戦後、祖父はＡ級戦犯として８ヶ月巣鴨拘置所にあり、その後野球はもとより、世間とのかかわりも持たず、庭に花をつくらせて花売爺と称しておりました。自分の誕生日には毎年子供、孫を集め、折詰めをごちそうしておりました。今思うと当時の経済状態としては精一杯のことだったと思います。一切の公職につかないと申していた祖父も河野 一郎氏のおすすめに従い、競馬会の理事長として共に老朽化した中山競馬場のスタンドの建て直しに力を注ぎました。競馬については何の知識も無く、関係のあるのは有馬という「馬」のついた名前だけと申していましたが、「競馬を一部の人の賭けの対象としてではなく、一家中で楽しめる娯楽にしようと思う」と古い中山のスタンドで楽しそうに話してくれました。また「野球のオールスター戦のように競馬でもファン投票によって選ばれた馬によるレースをしたらどうかと考えている」とアイディアも話してくれました。国のためによかれとしてきたことが敗戦という結果になり、自分の人生のしめくくりをしたつもりでいたのが、もう１度社会のために役立つ事があればと考えたと思います。新しい事に前向きに取り組んでいるのが大変楽しそうで、その構想を終始腰巾着であった私に話しておりました。

その構想が実りグランプリとして第１回のレースが行なわれた数日後、目的としていた健全娯楽としての今日の隆盛も、後に自分の名前を冠して頂いた有馬記念も二度と見ることなく、昭和32年（1957）１月９日に世を去りました。

今日、私が80歳になっても、野球をはじめ世界各国のスポーツをテレビで楽しめるのは、祖父の上手な手ほどきのおかげと感謝しております。

知ってほしいこんな資料（65）

「新野球いろはかるた」

今回ご紹介するのは企画展「子供の遊びと野球」（～２月１日）で展示中の「新野球いろはかるた」です。

「むちゃくちゃに 振って青田は ヒットする」

“む”の読み札は、先ごろ野球殿堂入りが決まった青田昇氏の豪快なスイングをそう表現しています。

このいろはかるたは読み札と絵札各44枚のセットで構成されています。読み札は、現場で取材している野球記者がつくったのではないかと思わせるくらい、それぞれの選手のプレーや特徴を写実的に表現しています。また、絵札は白黒写真に後から着色したものでおよそ60年前のものとは思えないほどカラフルな色使いです。テレビのまだない時代、躍動感のある読み札と絵札から、当時の子供たちは選手のプレーを想像しつつ、かるたを楽しんだのでしょう。

ちなみにこのかるたは、巨人の青田選手（戦後は1948年から巨人）と、南海の別所選手（48年まで南海）の札があることから1948（昭和23）年のものと思われます。

「新野球いろはかるた」は、企画展終了後も引き続き常設展示で展示予定です。ぜひご覧ください。

学芸員　関口 貴広

こんにちは図書室です

明治時代の野球書「野球虎之巻」

博物館が開館した1959年当時、明治・大正時代の野球の本などを多く収集し保存してきました。これらの本は現在では入手困難なものが多く、当館の貴重な蔵書として閲覧に利用されています。その中から今回は「野球虎之巻」をご紹介します。

「野球虎之巻」（橋戸 頑鉄著　運動世界社発行　明治44年11月10日発行）は全176ページで、タテ15cm ヨコ9.3cmの文庫本サイズの本です。内容は本文、附録、規則（日本語と英語）の３つに分かれています。著者は早稲田大学野球部の橋戸 信（頑鉄はペンネーム）で、明治38年に発行した「最近野球術」（明治38年早稲田野球部が渡米し、アメリカで学んだことを著したもの）に続く著書です。序には「野球の本はいろいろと出版されているが、複雑でわかりにくい。この本は、新しく野球を研究する人にとって鍵になるために著した」とあります。野球に詳しくない人たちのために、規則の解説や各ポジションにはどんな人が最適かなどが説明されています。１つの文章が短く読みやすいので、野球を始めたばかりの人だけではなく、誰でも野球に興味が持てるような本です。中でもニューヨーク・ジャイアンツのクリスティー・マシューソン投手（通算373勝の1900年代初期に活躍した選手）が語る投手論の変化球の投げ方や直球と変化球の使い方などは、今読んでもなるほどと思う読み物になっています。

図書室にはこの他にも、「野球案内」（安部 磯雄著　第３版　明治42年発行）「ベースボール及びクリケット」（津田 素彦著　明治32年発行）など明治時代の野球関連本を多く所蔵しております。これらの本は図書室で閲覧できますのでぜひご利用下さい。

司書　小川 晶子

≪維持会員を募集しています！≫

財団法人野球体育博物館は、昭和34年に野球専門の博物館として開館して以来、野球や体育に関する資料を収集・保管・公開してきました。バット等の実物・写真資料は約３万点、図書・雑誌は約５万冊を収蔵しており、展示や閲覧という形で多くの方々に利用していただいております。

また、年１回競技者表彰委員会と特別表彰委員会にて野球界の功労者を選出し、「野球殿堂入り」として表彰しています。

維持会員とは、このような博物館の事業にご賛同いただいた方々に、維持会費をお願いし、博物館の運営をご支援いただくものです。

1．会員の特典

(1)当博物館発行「ニュースレター」(季刊) 送付します。
(2)無料で博物館に入館できる優待証を発行します。
(3)アメリカの野球博物館(クーパースタウンにある)にも無料で入館できます。
(4)会員以外の方でも利用できる博物館招待券を差し上げます。
(5)イベント情報などを優先的にご案内します。
(6)博物館で販売している商品が10%引きになります。

＊新個人会員には上記の特典のほか、『野球殿堂2007』を進呈します。
＊新ジュニア会員には上記の特典のほか、「野球体育博物館オリジナルピンバッチ」を差し上げます。

2．会員の種類と会費

年会費（４月～翌年３月迄）

法人会員	１口	10万円
個人会員	１口	１万円
ジュニア会員（小・中学生）		2,000円

ご入会月により、初年度年会費の割引があります。

ご入会月	４月～９月	10月～12月	１月～３月
維持会費(個人会員)	10,000円	5,000円	2,000円

＊今、ご入会されますと３月までの会費は2,000円となります。
＊2009年度の維持会員も受付けておりますので、よろしくお願いいたします。

3．ご入会の方法

①館内にあります「維持会員募集のご案内」の“入会申込書”に、必要事項をご記入のうえ、係りにお渡しいただくかお送りください。
「維持会員募集のご案内」は郵送もいたしますので、ご希望の方は博物館までご連絡ください。
②“入会申込書”が届きしだい“維持会費のご請求書”をお送りしますので、維持会費をお振込みください。

お問い合わせ　博物館 業務部　高城(タカギ)・山口
皆様のご協力、よろしくお願い申し上げます。

博物館からのお知らせ

● 博物館のご案内

場　　所　東京ドーム21ゲート右
開館時間　３月１日～９月30日　AM10時～PM６時
　　10月１日～２月末日　AM10時～PM５時
　　(入館は閉館の30分前まで)
入 館 料　大　　人　500円 (300円)
　　小・中学生　200円 (150円)　(　　) は20名以上の団体
　　65 歳 以 上　300円
休 館 日　月曜日（祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館）
　　年末・年始（12月29日～１月１日）

《２月・３月・４月の休館日》
２月　２日～９日・16日・23日
３月　16日・23日
４月　６日・13日・20日・27日

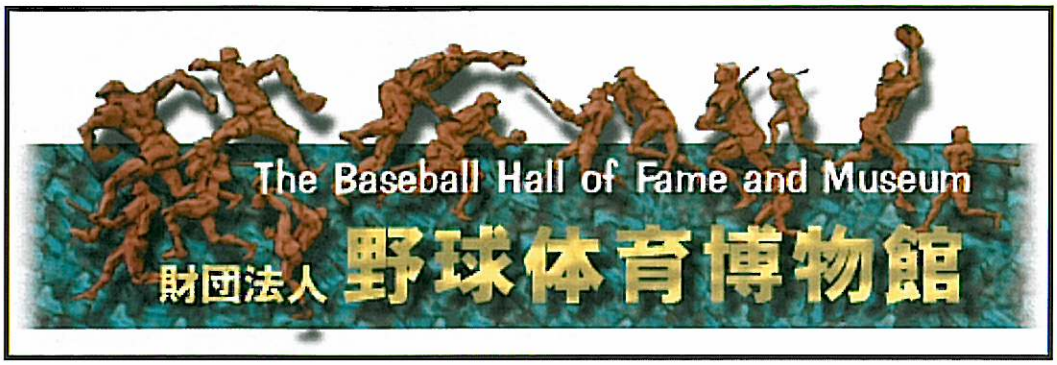
【休館のお知らせ】

２月２日(月)から２月９日(月)まで、館内改装のため休館いたします。
休館中、お電話でのお問い合わせなどには対応いたしますので、よろしくお願いいたします。

●編集後記
WBC日本代表は、２月16日から宮崎で合宿を行います。２月24日からは、オーストラリア代表などと強化試合を行い、いよいよ３月５日から東京ドームで第１ラウンドが始まります。日本チームを応援しましょう！

Newsletter Vol.18 / No.4
2009年１月25日発行
編集・発行　財団法人　野球体育博物館
〒112－0004　東京都文京区後楽１－３－61
Tel　03（3811）3600　Fax　03（3811）5369
http://www.baseball-museum.or.jp/
定　価　100円

平成13年3月13日第三種郵便物許可　2009年1月25日発行　年4回（1、4、7、10月の25日発行）
Newsletter
THE BASEBALL MUSEUM SINCE 1959
Vol.18 / No.4



リレー随筆(35)

競技者表彰委員会幹事　　森本　博樹（西日本新聞社）

丑（うし）年が始まったと思ったら、もうすぐ春季キャンプがやって来る。歳を取ると、ときの経つのが速くなると言われるが、50歳を過ぎてから１年１年実感している。こんな時期に正月の話をすると笑われるかもしれないが、年賀状を見るたびに思い浮かべる人がいる。2001年に野球殿堂入りした故・根本 陸夫夫人の隆子さんである。

隆子さんは筆字の達人。今でも素晴らしい文字を書いて送っている。ご主人が亡くなり、その数はかなり減った。根本氏が西武ライオンズやダイエーホークス（現ソフトバンク）で〝暗躍〟しているころは、毎年2000枚の年賀状を出していたという。それも現在のようにパソコンではない。宛名書きは隆子夫人の役割で、丁寧に１人１人に送付した。私などは100枚程度でもフッと言っている。書き終えるのにどれくらいの時間を要するのか。考えただけでも気が遠くなる。

根本氏が死去して、今年４月でまる10年となる。生きていれば83歳である。フロントとして活躍したころにつけられたニックネームは「球界の寝業師」「特殊潜航艇」など。正義の味方といった愛称とは無縁。一種独特の目つきをしていたし、その容貌にも凄みがあった。

でも、と言いたいのは、九州のホークスファンに勝つ喜びをプレゼントしてくれたのは、まぎれもなく根本さんである。根本さんは1992年オフにホークスの監督に就任。その当時、私はダイエー担当をしていた。根本さんとの初めての出会いである。先輩たちから「何をするか分からんから気を付けろ」とアドバイスを受けたが、根本さんはほとんど動かなかった。トレードもしなければ、新外国人選手も獲らない。その理由は「自分たちの本当の実力を分からせるため」。93年のホークスは45勝80敗５分けでダントツの最下位。根本さんの予想は「40勝」だった。そのオフに大型トレードを仕掛け、今季から監督に就任した秋山外野手らを獲得。その後は王監督を呼んで、常勝軍団を作ったのは承知の通りである。

根本さんはユニークな言葉も残している。知人たちから教えてもらったものが多数のようだが、生きていく上で味わい深い。ザーッと書き出してみた。

「ふて腐れたら自滅する」
「怒っても15分」（怒られる時に、口ごたえをせずに黙っていれば、怒る方が音を上げる。その目安が15分）
「偉く（出世）なればなるほど侍大将でなく、羊飼いになれ」
「仕事は生きるための手段」
「朝令暮改はドンドンしろ」
「絶頂の時こそ引け」
「惜しいはない」
「若者は未来に対する破壊力がある」
「テーマのない会議は30分もたない」

ホークス担当をしていたころは理解できなくても、それなりの年齢を重ねて分かるものもある。

現在の日本プロ野球界で根本さんのような人物は見当たらない。希有という点では反論の余地はないだろうが、こんな人が再び出現しないかとも思う。そう言えば、根本さんは生前、以下のようにも話していた。「１人いたということは、次ぎも出てくる、ということだ」